

## 女性と仏教

愛知学院大学

引田 弘道

(キーワード)

女性、仏教説話、ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター

古代インドの女性観に関しては、最近、原 實博士によってまとまった研究がなされた。そこではヒンドゥー教の文献を中心に、貞女の実像を浮き彫りにしている。ところで、仏教に於いて女性の果たす役割を考えた場合、バールフットの仏塔の石造欄楯にある寄進銘や仏像などの刻文に数多くの出家・在家の女性の名が認められる。王妃のような支配階層の貴婦人や、富裕な商工業者の婦人たちにも熱心な仏教信者がおり、しかも彼女たちは自身の名で寄進するほどの力を家庭内でもっていたことを物語っている。彼女たちが仏教に惹かれた理由を推察した場合、教理的な側面よりも仏教説話の中に登場する様々な性格や職業の女性たちに我が身を置き換えて、それをきっかけに仏教自体に興味を持ったのではないかと推察した。そこで11世紀にクシェーメンドラによって編集された『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』より、様々な女性像を選び出してみた。もちろん、このテキストはかなり後世のものであるが、対応する物語はかなり古くまで遡ることが可能なものも多く、仏教の一般的な特徴を物語っていると看做してもよからう。

それらの女性像を分析した場合、まず第1には、王や王子の妻を対象とした、彼女たちの貞節を強調した物語が挙げられる。例えば夫に従順な妻を描いたヴィシュヴァンタラ王子物語(23章)、どんな状況にあっても夫を見捨てない妻を描いたクナーラ物語(59章)、結婚するも夫婦の交わりに興味のない妻を描いたマハーカーシュヤパ物語(63章)、貞節を証明するヤショーダラー妃や側室の姦計にあい夫に裏切られたパドマーヴァティー妃を描いたパドマーヴァティー物語(68章)である。第2には、男性とのロマンスの主人公となる女性たちである。たとえば王家断絶を避けるため苦行者を誘惑するシャーンター王女を描いたエーカシュリングガ物語(65章)や王子スダナと恋におちたキンアラの乙女マノーハラーを描いたスダナとキンナリーとの物語(64章)が挙げられる。第3には、不貞を働く王妃や、金に目が眩んだ娼婦といった非難すべき女性たちである。たとえば、義理の息子クナーラ王子に懸想し、それが叶わぬと彼に報復したティシュヤラクシャー王妃を描いたクナーラ物語(59章)、欲に目がくらみ、若者を殺して彼の親族から耳や鼻をそぎ落とされた遊女ヴァーサヴァダッターを描いたウパグプタ物語(72章)、様々な媚態で王を誘惑する踊り子に化けたカヴィクマーラ王子の物語(66章)である。

以上の物語において女性が果たす役割が如何に重要であるか、そしてその物語を聞いた女性たちが仏教に関心をもってきたのかを説明していきたい。